

戦略的創造研究推進事業

(社会技術研究開発)

平成29年度研究開発実施報告書

「持続可能な多世代共創社会のデザイン」

研究開発領域

研究開発プロジェクト

「農山漁村共同アトリエ群による  
産業の再構築と多彩な生活景の醸成」

研究代表者 大沼 正寛

(東北工業大学大学院 教授)

## 目次

1. 研究開発の実施内容 .....	2
1 - 1. プロジェクトの達成目標.....	2
1 - 2. ロジックモデル .....	6
1 - 3. 実施方法・内容 .....	7
1 - 4. 研究開発結果・成果.....	15
2. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況 .....	22
3. 研究開発実施体制.....	22
4. 研究開発実施者 .....	23
5. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など .....	24
5 - 1. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など .....	24
5 - 2. 論文発表 .....	25
5 - 3. 口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表） .....	25
5 - 4. 新聞報道・投稿、受賞等.....	25
5 - 5. 知財出願.....	26

## 1. 研究開発の実施内容

### 1-1. プロジェクトの達成目標

#### (1) 全体目標およびリサーチ・クエスチョン

◎本P Jは、農山漁村に遺された地域資源を現代的な観点から捉え、持続可能な産業の再構築基盤となるような共創活動に着手・着目し、同様な動きが群として各地に広がるとともに、これが多彩な景観の醸成、地域らしさの深化につながるような一連のしくみを明らかにすることをめざし、以下をR Qおよび目標とする。

・R Q 1：農業、鋼工業、建築、ものづくり、アートなど、遺された地域資源を活かし、身体的技能を通して価値を生み出す生業・活動に着目する。東日本大震災を経た東北地方でも、農山漁村の地域資源は未だに多く遺されており、これらをもとに価値を生み出す生業・活動は、域内外に開かれた共創の動きによって、新たな展開に結びつけることができるのではないかと。そして、そうした共創がネットワークを多様に構築すれば、分散連携型の地域産業形成につながるのではないかと。

①すなわち、「地域の素材や環境を活かし、身体的技能や知恵を通して価値を生み出す生業・活動の共創様態」を「共同アトリエ (C A : Co-atelier)」と定義し、実践例の創出・育成を図り、そのモデルと発展性を提示することを第一の目標とする。

・R Q 2：生業だけでなく地域の景観にも着目する。持続可能な地域像を考えると、農山漁村においては、その地域の資源・環境と生業が結びつき、生業を通して生活者が資源・環境の保全を主体的に行う状況が、持続のための望ましいかたちの一様であって、それは地域らしい「生活景」に現れるのではないかと。

②すなわち、「生活景 (L S : Life-scape)」なる既往概念を、農山漁村に照らして、「生業と結びつく資源・環境からなる風景」と再定義し、集落、空き家、未利用材といった資源・環境を点検することで、資源・生業・環境の相互関係および地域らしい景観の構造と醸成過程に関する基礎論を導出することを第二の目標とする。

・R Q 3：地域の産業・生業を支えるプレイヤーと人脈の広がりに着目する。彼らは多能的な人々も多く、共創の現場では、世代や志向などの多様性、相互補完性を重視する傾向にあり、彼らのコミュニティやネットワークが、新たな分散連携型の地域産業を生み出すのではないかと。

③すなわち、「内外／多世代の人々が地域資源に気づき、共創活動が形成・連携するための学習ツールや参集場を創出して、共創を実践する個と群の成長に関する方法論を提示する」ことを第三の目標とする。

#### (2) 平成29年度の目標

○東北農山漁村のC A / L Sデータベースを充実化させ、比較考察を重ね、生活景の醸成をめざす共同アトリエのモデルを提示する。あわせてその検討をもとに、実践に携わる特定事例の位置づけを明確にする。

○3つの特定事例について、将来の実装に向けた共創の取り組みを深化させる。

- a) 丸森柔和材コアトリエについて、地域資源・人材の相互交流・共同事業に取り組む、また共同の場づくりや共創プログラムの検討を行う。
  - b) 保存食関連について、観察に適した事例を抽出し、その調査研究に着手する。
  - c) スレートCA/LSについて、4大産地におけるワークショップキャラバンを行い、地元の意識啓発と人材発掘、活用保全の連携・具体化を進める。
- 特定事例を中心とした比較考察に資する、東北・国内・海外のCA/LS事例研究を進め、その特徴や相互関係、景観の特徴などについて分析考察する。
  - 一連の理論化・検証等に必要な学術発表および地域間連携活動等を行う。
  - 関心層・一般市民への意識や感性に働きかける手法について検討し、活動発信のための「季刊コアトリエ」を年4回発行するとともに、ホームページを開設する。

### (3) 背景

農山漁村地域では、元来の生業や伝統産業に加え、地域資源に根ざした近代産業が隆盛した時期もあった。生産と生活が一体化した前近代的な生活文化を基層として近代化が重ねられたが、家庭や地域社会における多世代の相互協力に対する認識は共有されていた。また、個々の作り手（本PJでは「単アトリエ」）が健在で、同業者組合が生産を束ねる例も多かった。だが現在は、伝統産業も近代産業も担い手不足に悩んでいる。そこで「共同アトリエ」の着想に至ったのである。

また地方では、度々企業誘致が目指されてきたが、生まれた景観は「無機質な工業団地」に代表され、「手入れの届いた農村」のような、主体的で地域らしい景観ではなかった。そうした地域の多くが今日、持続可能とは言い難い状況に至っている。必ずしも資源が枯渇した訳ではないのに、である。むしろ、海外の生産に頼る企業経営が一般化した現在、状況は悪化している。だからこそ、地域の資源・環境と生活・生業・産業が織りなす「生活景」に立ち返り、再点検する必要がある。

他方、グリーンツーリズムや田園回帰など、経済合理性だけでない新たなライフスタイルの萌芽もうかがえる。不便な地域に移住し、資源を活かしつつ内外との情報交換を行う多能的な人々は、地元の多能的な古老とともに、唯一の希望である。

本PJは、こうした動きを「共創／連動」につなげていこうとするもので、「多世代共創や地域内外連携による地域資源のつなぎなおし」「SDGsにおける働きがい／住み続ける／陸の豊かさ保持」などに関わる試行例と位置づけられる。

なお、国策「21世紀の国土のグランドデザイン」なども関連するが、直接参照するのは、岩手県大野村の「裏作工芸」（1980年頃）や、宮城県大崎市の「鳴子の米プロジェクト」（2006年頃）といった、具体的・内発的な研究開発事例である。とりわけ東北地方では、東日本大震災により地域的課題がより早く深刻化する一方、多くの有能な人材が集まっており、PJを試行する意義と可能性があるといえる。

### (4) 目標・RQ・実施項目についての微少変更事項について（補足）

平成29年度を通して、根本的な変更はないものの、以下のように研究の基礎概念や語意を整理し、微少変更を行うことが適切であるとの帰結に至った。

以下、理由とともに順次列挙する。

- a) PJの目標について・・・年度当初に掲げていた3目標（地域産業の再構築に資する農山漁村共同アトリエのデータベース開発と参照ツールの普及／生活景の醸成

をめざした農山漁村共同アトリエ事例の創出実践とマネジメント体制確立／分散ネットワーク型地域産業と生活景の醸成をめざす地域産業デザイン論の検討と還元・発信) について、とくに目標項目の1と2は、いずれにも共同アトリエの開発に関わる項目で、内容上の棲み分けがやや不明瞭であった。また、多世代共創に関する言及が不足していた点も否めない。このことから、上述の通り、まず3目標を統合した上位の目標を明文化し(項目◎)、続いて、①はCAのモデルと発展性提示、②は資源・環境とLSの基礎論、③は多世代共創のプレイヤーと成長過程と、①②③の番号を付して3目標を明確化し、文章表現上も修正を行うこととした。

b) RQについて・・・年度当初に掲げていた6つのRQは、数として多いうえ、内容上の棲み分けがやはり不明瞭であった。3目標にあわせて3つのRQに統合整理する必要に帰着し、以下の表1のように再構成した。

表1 本PJにおけるRQの整理統合と再構成(新旧対応表)

新RQ(2018.3)	旧RQ(2017.4)
RQ1 地域資源をもとに価値を生み出す生業・活動は、域内外に開かれた共創の動きによって、新たな展開に結びつけることができるのではないかと。そうした共創は、分散連携型地域産業形成につながるのではないかと？	旧RQ2 CAの意義と多世代共創状況
	旧RQ5 分散ネットワーク型地域産業デザイン
	旧RQ1 多様な産業遺産の再評価と生業場としての再生可能性
RQ2 地域の資源・環境と生業が結びつき、生活者が資源・環境の保全を主体的に行う状況が望ましく、それは地域らしい「生活景」に現れる(点検の意義がある)のではないかと？	旧RQ4 CAがめざす生活景醸成=LSの意義
RQ3 共創の現場を支えるプレイヤーは、世代や志向などの多様性、相互補完性を重視する傾向にあるのではないかと？ 彼らのコミュニティやネットワークが、新たな分散連携型地域産業を生むのではないかと？	旧RQ3 地域に根ざしたマルチクリエイター像
	旧RQ6 小さな多世代共創による地域産業形成モデルと多世代共創の意義

c) 実施項目と番号付与について(1-3参照)・・・PJの実施項目は、これまで①、②・・・⑥と番号を付していたが、目標やRQの番号とも混同しやすいことから、A、B・・・Fと振り直すこととした。

また、基盤調査をA、実施者3大学による比較研究についてB+枝番1～3、そしてPJの中核となる特定(開発)PJについてC+枝番1～3を「衣食住」の順次となるよう振り直し、項目を整理した。

なお、実施項目のうち「多世代共創コアトリエの事業運営形態調査」(旧③-2/宮城大)については、この実施内容であると、これから創出・育成をはかるべきCAそのものが相当数既設、既知であることになってしまいうことに気づいた。ここでの「多世代共創コアトリエ」とは、本PJがめざすところの、参画者の世代構成が複数世代的(概ね老若男女からなること)で、地域資源を活かして現代的な価値を生み出す共創様態を想定したものである。例えば青森県の「弘前旧岩木町の嶽きみ」は、戦後引き揚げ者による開拓時代に始まり、稲作や酪農などあらゆる農業を

試行したあげく、南斜面の日照条件と厳しい寒暖差によって、トウモロコシ生産の適地であることを突き止めた事例であり、この間、故人も含めて多くの世代が関わってきたほか、近年は婦人グループANEKKOが立ち上がり、販促の主軸となっている。つまり、農業のブランド化や6次化を多世代で共創していると同時に、営みそのものが改革の歴史を有しており、周辺地域に波及効果（フォロワー＝新世代）を生んでいる。ただ、フィールド調査過程ではこのような事例に遭遇したものの、研究計画時点において、かような事例が一定数見つかることが既知であったわけではない。こうした成功例の事例研究は、新規実装をめざす研究開発プロジェクトという性格からすれば、第一義とするのではなく、副次的位置づけとして継続しながら、むしろ、これから多世代の人々が地域資源に気づくためのツールを創出し、そのなかに位置づける必要性に帰着した。こうしたPJ内の討議の経過から、本項目は、「市民の地域資源への気づきのための支援ツールの開発」（新B1／宮城大）と修正した。

さらに、「共同アトリエと景観デザイン」（新B2／旧③-3／秋田公美大）は、内容を特定すべく、「生業・産業の景観とその連携性に関する研究」と修正した。



### 1 - 3. 実施方法・内容

#### (1) 実施項目の全体像

目標達成のため、以下AからEの5つを実施項目として知見をまとめ (F)、その後にかけての社会実装をめざす (G)。まず事例をあつめ (A1)、概念を定義づけ (A2)、知見を記し発信する (A3)。この基盤作業をもとに、資源探索ツールの開発 (B1)、産業景観群の連関性 (B2)、生活景の構造・継承 (B3) といった研究を展開する。同時に、A・Bで得た事例を参照しつつ、衣食住に照らした3つの特定開発PJを試行する (C1・C2・C3)。各々、PDCAサイクルによって事例毎の小目標にむけて活動を深め、期間中盤にサミットを開催してCA群の相互連携をはかり (D)、課題に向きあうWSを重ねて小目標を達成し (E)、全体のまとめに知見を寄与していく。

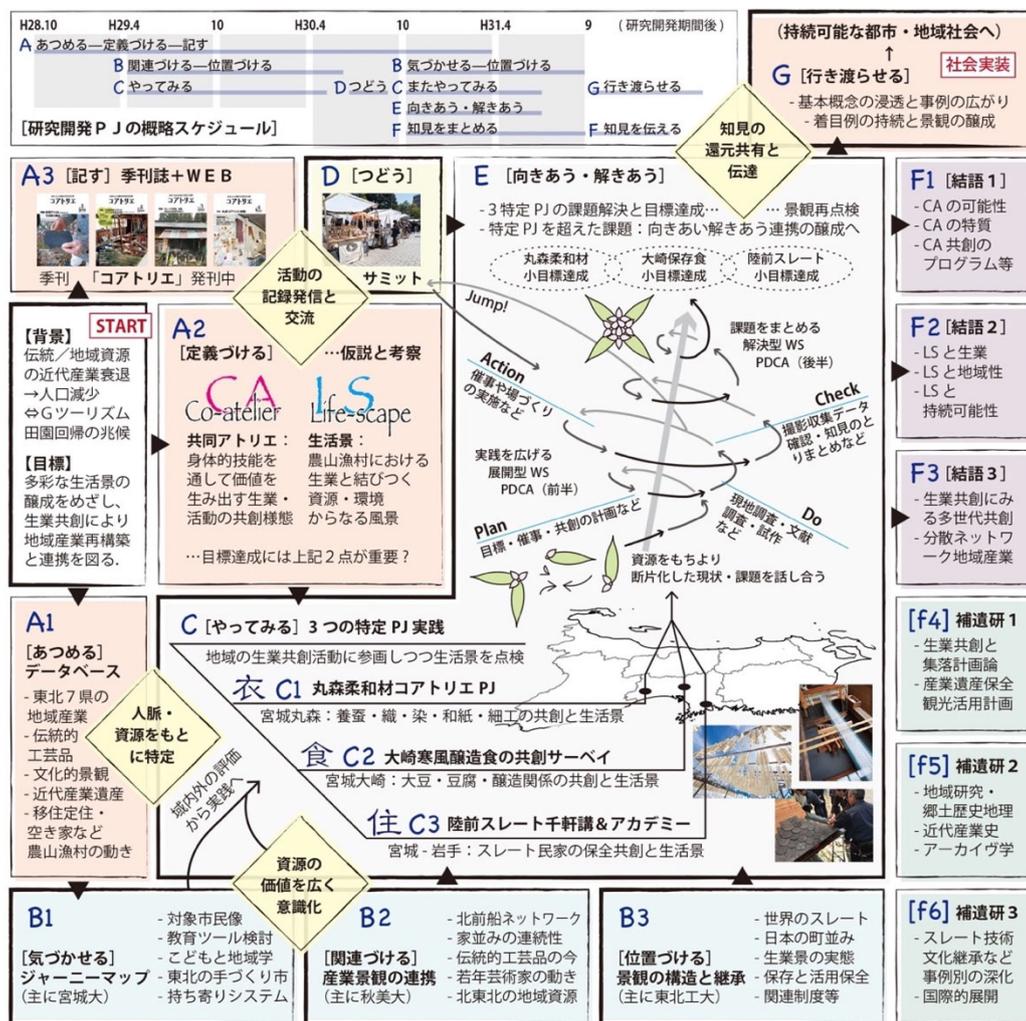


図2 プロジェクトの実施項目と全体像

## (2) 各項目の実施内容

### ① 実施項目A1・A2・A3における平成29年度の実施内容・結果

(目的) P J 全体の推進に必要な基盤調査、概念整理、情報発信を行う。

A1 : CA / LS データベース (DB) の充実化

(変更点 : DB は常に未完であるため、「充実化」とした)

A2 : CA / LS の定義精査と、相互関係検討、モデル提示

(重要項目のため、旧A1 から分離独立させた)

A3 : 学術発表、活動発信および地域間連携活動等 (広島・秋田・新潟他)

(変更なし)

(内容と結果)

#### ○A1-1 : CADB の内容分類と構築 (変更点 : CA に特化、文言整理)

- ・ A2-2 の検討により、前年度の収集情報はCAとして未成立のものが多いことが分かったため、これらは予備軍としての生業・活動DBとすることとした (図3)。
- ・ 事例C1 を実践しながら他事例を比較精査し、情報収集を続けることとした。

#### ○A1-2 : LSDB (スレート) の充実化 (変更点 : LS に特化、文言整理)

- ・ 代表者 / 実施者阿部の収集情報を同一DBに統合し、充実化を図った (図4)。
- ・ 分布情報だけは2000件に及ぶため、今後の実践過程で詳細を入力していく。

#### ○A2-1 : CA / LS 概念検討のための比較事例調査 (変更点 : 調査に特化)

- ・ 4/9鶴岡、5/26燕三条 (写真1)、1/12九州北部 (写真2)、3/24新庄などの視察を通して、著名な産業集積地から分散した農山漁村エリアまでの多様性を把握した。今後は両者が複雑にネットワーク化されてくる可能性もある。
- ・ 4/25塩竈、8/13石巻、1/10相馬、3/26岩手三陸などの視察を通して、生活景を構成する資源・環境の充実 / 疲弊状況を比較考察した。被災地を比較することで、営みの目標たるLSの意義を再認識した。

#### ○A2-2 : CA / LS の関係からモデル案提示 (変更点 : 概念検討に特化)

- ・ 実施者・協力者の協議によりCAの定義を再考し、上述の定義に至った (図5)。

#### ○A3-1 : 季刊コアトリエによる活動の記録と発信 (変更点 : 季刊誌に特化)

- ・ 活動の記録・報告として、第2号から第5号までの4冊を発行した (図6)。

#### ○A3-2 : WEBによる活動の記録と発信 (変更点 : WEBに特化)

- ・ 季刊コアトリエの内容をひろく周知するものとして、WEBを開設した (図7)。



図3 生業・活動DBの例



図4 スレート民家DBの例



写真1 体験工房・三条鍛冶道場



写真2 九州窯業の里・波佐見

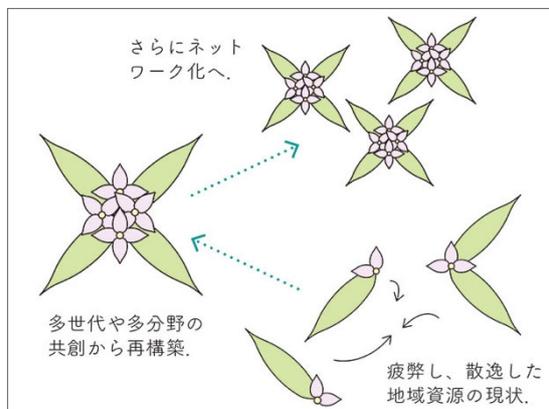


図5 コアトリエの概念イメージ



図7 P J ホームページ



図6 季刊コアトリエ 第2号～第5号表紙

② 実施項目B1・B2・B3における平成29年度の実施内容・結果

(目的) PJにおける研究面を進めながら、項目C群の開発実践への参考知見を得る。

B1：市民の地域資源への気づきのための支援ツールの開発

(変更点：CAが未創出ゆえ事業運営調査ができないため創出前に着目)

B2：生業・産業の景観とその連携性に関する研究

(微少変更：共同アトリエと景観デザインに関する研究は広すぎるため)

B3：文化遺産保全と生活景醸成に関する事例調査 (変更なし)

(内容と結果)

B1-1：一般市民の気づきを支援する地域資源ジャーニーマップを開発

- ・マルシェ・市などの各地の取組を取材し、東北各地における開催状況を把握した。これらのなかには数百年続く伝統的なものもある一方、テーマ性がつよいものや、若い世代向けに新設されたものも多く、一般市民への関心の広がりを確認しつつある。その一方で出展者は分散した存在に留まり、衣食住のライフスタイルの改善や市民が真の地域資源に気づくための情報や機会は、必ずしも十分でないことにも気づかされた。すなわち、WEBを用い、若者をはじめ多世代に向けて、楽しく感性に訴えるラーニングプログラムを、コアトリエ創出のための「気づき」への導入として開発すべく、素案のデザイン検討を開始した。

B2-1：秋田、山形、新潟から北陸山陰等へ至る産業景観の連関調査

- ・近代を通して現代に伝わる地域資源は、それ自体が域外との連携性をもっている。北前船で栄えた日本海側の文化圏は、往時を過ぎた現在も瓦屋根が産業景観の連関性を見せる。このことを確認する広域の視察調査を進めた (写真3, 9/3ほか)。

B2-2：東北日本海側の地域工芸・食産業等の現代的展開についての情報収集

- ・日本海側は豪雪地帯が多く農閑期に工芸が発達した。800年の歴史をもつ川連漆器の木地師 (写真4, 9/8) から若い作り手まで地道な取組の多様を把握しつつある。

B3-1：国内における文化遺産の景観保全、生活景醸成に関する事例調査

- ・5/2東京、2/21函館 (写真5) などの視察を通して、生活景を構成する資源・環境の要素と醸成価値、保全技術の課題を比較考察した。また、3/20山梨 (写真6)、3/26岩手などの視察により、深刻な人口減少における生活主体の課題、生業再構築の必要性について再考した。

B 3-2：海外のスレート産業の現状および建物保全・産業遺産に関する調査

- ・景観保全問題のある種の専門性（狭さ）を克服するため、台湾南部（写真7）および英国北ウェールズの視察調査（写真8, 写真9）を進め、スレート民家・産業の保全方策について考察を深めた。さらに、英国のシルク産業遺産を視察し（写真9）、生業景の真正性について考察した。



写真3 羽州瓦が連なる日本海側の産業景観



写真4 川連漆器の技を伝える麻生木工所



写真5 函館の町並み保全の動き



写真6 山村留学で人々をつなぐ山梨県早川町



写真7 廃村だが景観を守る台湾老七佳村



写真8 英国北ウェールズのスレート集落



写真9 国立スレート博物館と採石場跡



写真10 シルク産業遺産博物館の工場跡

### ③ 実施項目C1・C2・C3における平成29年度の実施内容・結果

(目的) P Jにおける開発実践を進め、社会実装をめざし、目標とする知見を得る。

C1：特定P J・丸森柔和材CA/L Sの多世代共創実践

C2：特定P J・大崎寒風醸造食のCA/L Sの多世代共創調査

C3：特定P J・スレート千軒講CA/L Sの多世代共創実践

(内容と結果)

C1-1：丸森周辺の多様な生業の歴史・現状を捉え、生業再構築の可能性を導出

- ・宮城県伊具郡丸森町の歩みを概括しつつ、養蚕およびシルクに着目し、生業再構築の可能性を秘めたプレイヤーとの協議を重ねた。大張、耕野、筆甫地区の養蚕農家や大内地区の地織保存会、草木染めの探求者、桑の皮とシルクをつかったシルク和紙（桑絹紙）、繭を用いた繭細工などの小さな営みである（写真11～14）。
- ・蚕室や工房など、単アトリエの生業場の調査を行った。いずれも用具や空間は特殊であり、技や構想を持ちよる共創空間との棲み分けは明快である（図8, 図9）。

C1-2：多様な関係者の共創拠点を整備し、共創内容を検討・計画

- ・C1-1のプロセスを経て、繭細工工房として間借りしている町家建物の一部を模様替え（小さなリノベ）して（写真15）、展示販売会を行った（写真16）。以後、ここでの定期的な会議を行っており、まさに共創の場づくりが実現した。



写真11 丸森での最初の顔合わせ会（5月）



写真12 養蚕農家の見学（7月）



写真13 シルク和紙工房の見学（9月）

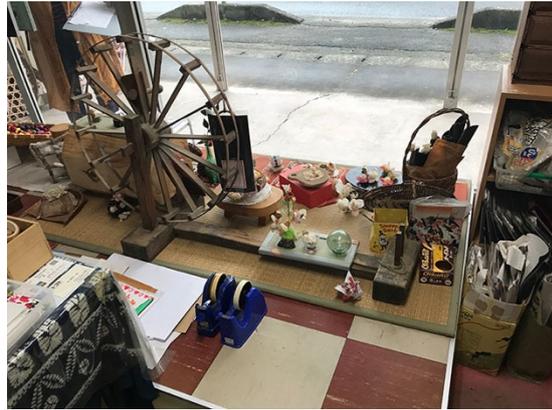


写真14 繭細工工房の見学（9-10月）

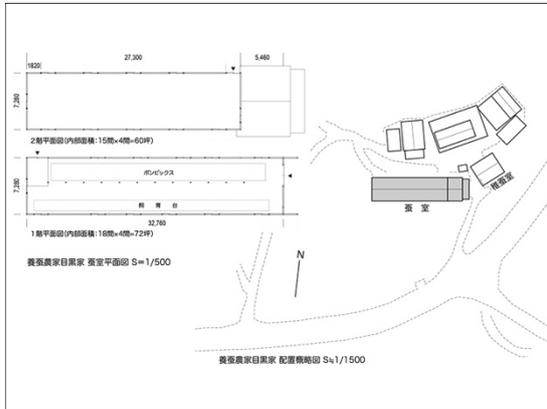


図8 養蚕農家の蚕室実測調査（10月）

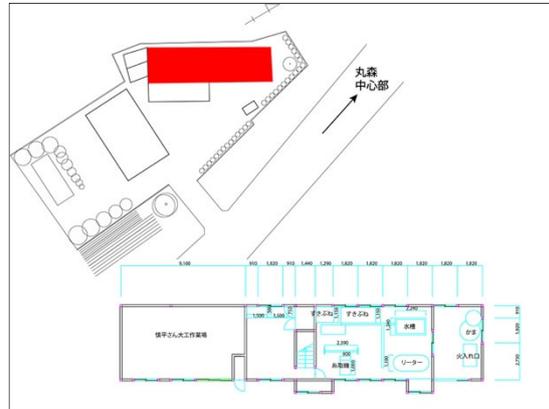


図9 和紙工房の実測調査（10月）



写真15 繭細工工房の一角を簡易リノベ



写真16 コアトリエにて正月前の展示販売会

C 2-1：世界農業遺産に指定された大崎地方の農・食の取り組み事例を取材  
 ・温泉街のある鳴子・岩出山、市街化された古川など、広域に広がる大崎市は、その長きにわたる稲作と利水治水および関連農業が一体として残っていることから、客観的評価を受けるに至った。本P Jでは、東北に多種多様に広がる農・食の取組のうち、生活景にも通じる事例を取材することから始めようと、大崎地方を選んだ。

- ・例えば寒風がつくる凍み豆腐の風景（写真17）、全国2位の生産を誇る大豆をもとに発酵食をつくる匂いや音の風景（写真18）など、多彩な生活景がみられる。
- ・これらをプロデュースする若手デザイナーの存在も頼もしい（写真19）。年度末には大豆食を開発する共創会議が開かれ（写真20）、引き続き観察を続けていく。



写真17 凍み豆腐の干場風景（1月）



写真18 若手が継ぐ麴専門店



写真19 八百屋とデザイン事務所の融合



写真20 大豆食の開発会議

### C 3-1：スレート千軒講（民家保全と資材リサイクル）を本格化

- ・かつてのスレート産地に赴いての現地ワークショップキャラバンを計4回実施した（写真21～24）。
- ・学びの場を開催することで案内のため訪問し、知遇を得ていく、というように、今後の活動の協力者を少しずつ募る効果があったといえる。

### C 3-2：卓越技能者を中心としたスレートアカデミーを開催

- ・スレート葺き技術、加工技術は国内では皆無に近く、宮城県に残るのみである。本P Jの協力者である卓越技能者による実演が、参加者の関心を集めると同時に、新たな若手職人育成の気運を高め始めており、実際、若手の参加もあった。

### C 3-3：スレート建築等、近代技術史における重要な未解明点の学術調査

- ・近代建築系の重要文化財の殆どがスレート葺きであり、ここでの技術保全は、地域文化のみならず、日本の近代史継承においても意義がある。技術や知識をより公益的価値に位置づけるため、文化財保存の専門家らに相談に伺った（写真25, 26）。



写真21 スレート千軒講WS（雄勝,7月）



写真22 スレート千軒講WS（入谷,8月）



写真23 スレート千軒講WS（登米,10月）



写真24 スレート千軒講WS（矢作,11月）

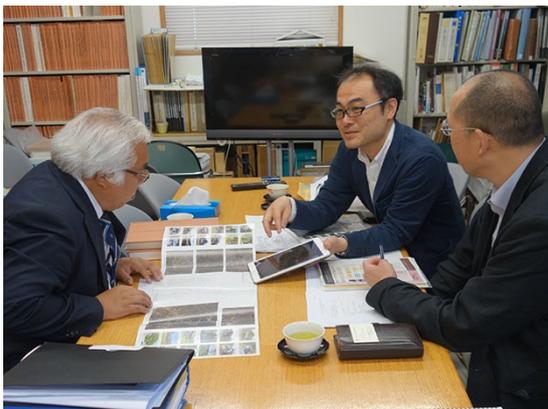


写真25 文化財保存技術協会での聞き取り



写真26 タイルの専門家に近代史の相談

#### 1 - 4. 研究開発結果・成果

##### (1) 明らかになったこと

Q1. 地域資源をもとに価値を生み出す生業・活動は、域内外に開かれた共創の動きによって、新たな展開に結びつけることができるのではないかと？ そうした共創は、分散連携型の地域産業形成につながるのではないかと？

- ・・・調査研究B1・B2等によれば、近年、地域資源を再評価・活用しようという動きは高まっていて、これが一般市民にも広がりつつあり、それは「手づくり系マルシェ」のような催事にも現れている。

そうした背景を受けつつ進めている特定PJ・C1では、養蚕、織物、染め物、和紙、細工といった蚕糸をとりまく小さな生業が散在していることについて、PJチームを含めた内外の人々が再評価をし、彼らが連携してパネルを作成したり、展示販売を行ったりする「共創」的な状況が始まっている。同じくC2では、大学チームの直接的参画は未だないものの、取材を続けている大崎市において、地場の農産品を高価値にプロデュースしている若手のデザイン事務所が活躍している。C3では、石屋根の保全工事という文化財にも通じる特殊技能ながら、ワークショップを続けることによって若手の関連職人が参加するなど、関連する業界や地域の小さな変革が起こりつつある。

これらはいずれも、地域資源をもとに価値を生み出す生業・活動が、域内外に開かれた共創の動きによって、新たな展開に結びつけることができる可能性を示すものであると考えられる。

他方、当初から遠い目標に掲げていた「分散連携型の地域産業形成」<sup>23)</sup>については、PJ着手から1年半しか経過していない現時点において、近視眼的な成果を求めることは早計であると考えている。特定PJ対象地域を引き続き観察・調査しながら知見を得られるよう努力していきたい。

**Q2. 地域の資源・環境と生業が結びつき、生活者が資源・環境の保全を主体的に行う状況が望ましく、それは地域らしい「生活景」に現れる（点検の意義がある）のではないか？**

- ・・・調査研究B3等によれば、C3にも通じる石屋根の町並み景観は明快で、英国北ウェールズの酪農地帯、台湾南部山岳地域とも、住民自ら施工したと思われる環境造形要素が多彩・独特な風景を形成しており、住民の言葉に誇りが感じられると同時にその本物の景観が、観光業に反映されていた。とくに英国では、スレート産業が未だに健在であった（もちろん後継者不足への悩みは聞かれた）。

これらを背景として、C3すなわち陸前地方のスレート集落において、調査やWSを重ねた。確かに、スレート遺産を卑下する人々が皆無ではないものの、本当は遺したい、といった思いが予想以上に聞かれ、遠隔の小集落においてスレート民家の所有者が連帯して修復工事を発注する事例の創出に寄与することができた。都市住民には理解しがたい可能性のある「誇り」や「価値観」かもしれないが、地域の資源・環境を活用保全する主体を持続させる重要な点といえよう。

なお、B3の他の事例として、国内の伝建地区や建物保全の状況を確認する一方、人口減少地域や東日本大震災の被災地にも足を運んだ。そのなかで、限られた住民が環境維持の現場で「共創」していることや、巨大災害が「生活景の虚無」を生んだものの、人々が小さな営みから再起しようと奮起していること＝生活景の再構築をもめざしていることを目の当たりにした。

地域らしい、多彩な生活景は、観察／実践地域においては共通の目標となっているように映る。だがもちろん、地域の資源・環境と生業が結びつきを失っていたり、生活者が資源・環境の保全を行う主体＝住民が極度に減少していたりと、各地とも課題

は多い。とくにこの課題は、必ずしも困窮したエリアと認識されていない地区、例えば美しい景観が評価されている伝統的建造物群保存地区のような地域においてもみられることから、それらを含めた一般的な課題として見出されるのではないかと考えている。

Q3. 共創の現場を支えるプレイヤーは、世代や志向などの多様性、相互補完性を重視する傾向にあるのではないかと？ 彼らのコミュニティやネットワークが、新たな分散連携型の地域産業を生むのではないかと？

・・・一連の調査研究と特定P J（C 1やC 3）によれば、活躍が目立つのは30代の若手や女性陣である。本P Jが農山漁村の地域資源（=地域遺産）を主対象としている時点で、否が応でも壮年の男性陣との課題共有は多いことになるが、そこに多世代共創を形成する重要なキーパーソンが存在している。

C 1の丸森コアアトリエで事務局を務める地域おこし協力隊員のA氏は好例といえ、今後も当該特定P Jの中核として期待される。またC 2の大崎地方におけるブルーファーム・H氏は、すでに同地方のみならず県内外のホープとして期待されている。また、C 3の建築技術継承の現場では、最近少例ではあるが、若手の職人希望者が出てきている。他にも、例えばB 1・B 2の一環で取材に伺った山形最上地方・新庄において、夏は農業、冬はストロー工房という麦藁細工を行い、そのデザイン性の高さから製作が追いつかなくなっている期待の30代・T氏の事例があった。T氏は、当地方の農村の課題を熟考してきた民俗研究家・Y氏を師と仰ぐなど、すでに多世代共創的な努力をしてきていた。現在は、彼らのコミュニティ／ネットワークが、積雪地方調査所に代表される郷土史的な地域文脈を基盤として広がりを見せ始めている。

すなわち、重要なプレイヤーが多様性や相互補完性を求めており、結果として多世代共創に至る様相を垣間見ていることになるし、その主体が若手であるほど、現代的なネットワークに通じており、様々な分散連携につながる可能性をみせている。

課題としては、そうした動きもやはり、限られたキーパーソンに集中していることであろう。そうした人々を消耗しないためにも、同等にふるまえる人々をもっと増やしていく必要があり、その意味でも一般市民に地域資源の価値を認識させる、ある種の教育的ツールが必要といえるだろう。

## （2）各項目の成果

### ① 実施項目A 1・A 2・A 3における平成29年度の成果・知見と課題

#### a) 概念整理

CA/L Sの概念と相互関係について論述上の精査が必要であったが、年度を通し、また実践を通して検討を重ね、概念整理を深化させることができた。

このうちCAは、「地域の素材や環境を活かし、身体的技能や知恵を通して価値を生み出す生業・活動の共創様態」とした。アトリエの呼称は「場」を想起させるが、現代の多様な共創のあり方を考えると、特定の物理的な場所にのみ成立するとは限らないことが、「共創場」から「共創様態」と修正表現した理由である。

また、とくに曖昧さを残していた「生活景」の概念が整理できた。後藤春彦ら（2000）は、都市計画分野の共同研究を踏まえ、「景観の地模様となるような生活に根ざした景観価値を発見・読解」するため、「生活景」なる概念を提示した<sup>1)</sup>。本研究の主対象は農山

漁村であり、生活・生業・産業といった価値化されにくい地模様という点で、まさに生活景に該当するが、本P Jでは、持続可能性に結びつけて再定義した点に重要性、新規性がある。農山漁村においては、その地域の資源・環境と生業が結びつき、生業を通して、生活者が資源・環境の保全を主体的に行う状況が、持続のための望ましいかたちの一様と考えられるからである。すなわち、「生活景（LS：Life-scape）」を「生業と結びつく資源・環境からなる風景」とし、生業が地域に根ざし、地域への還元を志向しているかを判別する要点とした<sup>2)</sup>。

本P Jは、CA系＝生業・活動から場づくりへと展開しても、LS系＝資源・環境から内包する生業・活動を育成しても、同じ大目標に向かう統合的構造を持っている。

#### b) 季刊コアトリエ

本P Jは、東北各地の協力者と共創を少しずつ重ねていく性格上、日々更新されるようなSNS的発信が適さない面があり、初年度末に季刊誌の制作を開始した。頒布も可能なデザインレベルを保って編集する一方、発行数は1000部前後と限定し、かつ地域の関係者への手渡しや郵送を行い、波及する効果が後から着いてくることを意図した。

すると、例えばC3＝スレート研究のため訪れた台湾南部の調査において、協力頂いた高雄市・三餘書店のWEBサイトにて、採り上げて頂く結果となった。ローカルズムではなく、趣旨を理解する人々に丁寧に伝達することを心がけるだけでもグローバルな情報伝達に至ることがあり得ることを、この成果は示しているといえよう。

また、A3の地域間連携活動、B2-1の産業連携研究に関連して訪れた新潟で得た知遇がきっかけで、C1＝丸森シルク関係を集めたコアトリエ4号を見た方から、将来的な連携可能性についての打診があった（本件は平成30年度に継続予定）。これも、誰に何を伝えるか、伝わるのかを、より精査して活動する必要性を示しているといえよう。

### ② 実施項目B1・B2・B3における平成29年度の成果・知見と課題

#### c) 多層構造と位置づけ

秋田公美大で進めている羽州瓦の景観は、かつて北前船でつながっていた日本海側の文化圏において、半ば廻船のバラストとしても有効だったという瓦材の普及要因に気づかせる。すなわち、本P Jが志向している農山漁村の生業は、前近代の古式な対象に限定されるのではなく、むしろ近代に様々なかたちで普及した過程をも包含するものである。地域での時間をかけた共創・育成にはこだわるが、当初の創立は「この地」でなくともよい。そのように位置づけることで、農山漁村各地が多様な連携を保ちながら、各々の個性を育むことを意図しているのである。こうした考えは、地域に根ざした生活・生業・産業が、様々なレイヤからなっているという多層構造を示唆するものであり、現代および将来においても、例えば歴史的なレイヤを意識しながら、新たな交通体系に対応する、といった複眼的思考を導くことにもつながるものといえる。

関連事項として、文化的景観、伝統的工芸品、近代化産業遺産といった専門分野からみた地域の評価がある（図10～12）。これらを参照しつつ、引き続き事例を観察、比較考察していきたい。

- [1 新潟県]**  
 ○1a1 山古志の棚田 [1-1 水田]  
 ○1a2 上船倉の棚田 [1-1 水田]  
 ○1a3 松之山の棚田 [1-1 水田]  
 ○1b 満願寺の稲架木並木 [1-1 水田]  
 ○1c 夏井の稲架木並木 [1-1 水田]  
 ●1j 佐渡西三川の砂金山由来の農山村景観[重要文景]  
 ●1k 佐渡相川の鉱山及び鉱山町の文化的景観[重要文景]  
 このほか2次調査対象地域9件あり【計:重要2+候補14】

- [2 福島県]**  
 ○2a 松川浦 [II-2 芸術背景]  
 ○2b 安積疎水 [IV複合]  
 ○2c 矢ノ原高原の蕎麦畑 [1-2 畑地]  
 ○2d 飯豊連峰の寝牛と白馬の雪形 [II-3 気象]  
 このほか2次調査対象地域3件あり【計:重要0+候補7】

- [3 山形県]**  
 ●3a1 最上川の流通・往来及び左沢町場の景観 [重要文景]  
 ○3a2 最上川 [IV複合]  
 ○3b 庄内平野 [IV複合]  
 ○3c 飯豊の散居集落 [1-7 集落]  
 ○3d 田川の赤カブ栽培と焼き畑 [1-2 畑地]  
 このほか2次調査対象地域6件あり  
 【計:重要1+候補10】

- [4 秋田県]**  
 ○4a 矢立峠の秋田杉林 [1-4 森林]  
 ○4b 山本町のじゅんさい採り [1-6 水景]  
 ○4c 八郎瀧 [IV複合]  
 このほか2次調査対象地域8件あり  
 【計:重要0+候補11】

- [5 宮城県]**  
 ○5a 小田田川の箕間 [1-6 水景]  
 このほか2次調査対象地域5件あり  
 【計:重要0+候補6】

- [6 岩手県]**  
 ●6a 一関本寺の農村景観 [重要文景]  
 ○6b 胆沢扇状地の散村景観 [1-7 集落]  
 ●6c 遠野 [IV複合]  
 / 荒川高原牧場・山口集落 [重要]  
 ○6d 小岩井農場 [1-3 草地]  
 ○6e 宮沢賢治に関連する文化的景観 [IV複合]  
 このほか2次調査対象地域11件あり  
 【計:重要2+候補16】

- [7 青森県]**  
 ○7a 十三湖の景観 [1-6 水景]  
 ○7b 下北のヒバ林 [IV複合]  
 ○7c 七里長浜の防砂林 [1-4 森林]  
 ○7d 中里町の冬の葦原 [1-6 水景]  
 ○7e 津軽の林檎畑 [1-2 畑地]  
 ○7f 車力村の海岸防砂林 [1-4 森林]  
 このほか2次調査対象地域9件あり  
 【計:重要0+候補15】

●は重要文化的景観

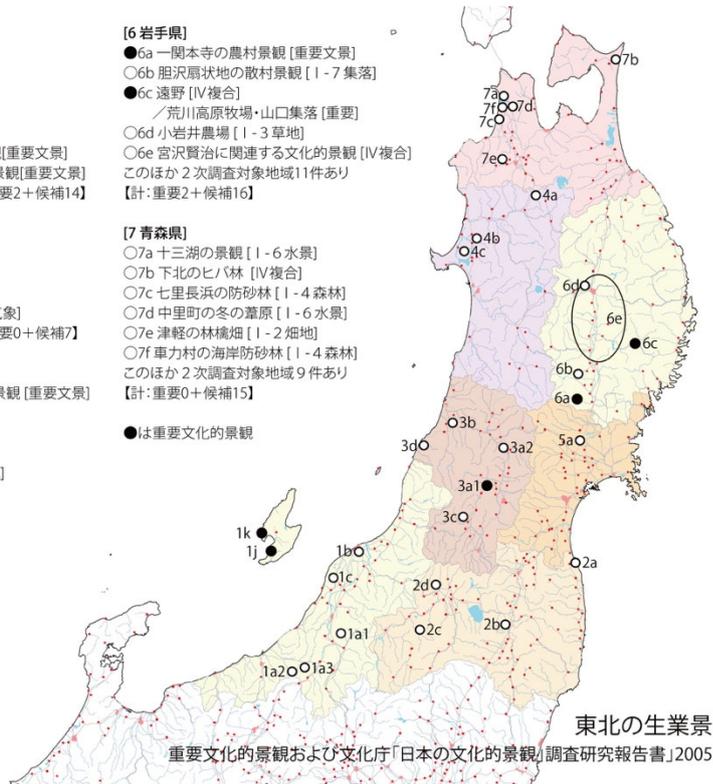


図10 東北7県の主な文化的景観<sup>4)</sup>

- [1 新潟県 16件]**  
 ▲11 羽越しな布  
 ▲12 越後与板打刃物  
 ▲12-2 越後三条打刃物  
 ▲13 塩沢紬  
 ▲13-2 本塩沢  
 ▲14 燕籠起銅器  
 ▲15 村上木彫堆朱  
 ▲15-2 新潟漆器  
 ▲16 加茂桐箆笄  
 ▲17 十日町餅  
 ▲18 小千谷紬  
 ▲18-2 小千谷縮  
 ▲18-3 十日町明石ちぢみ  
 ▲19 新潟・白根仏壇  
 ▲19-2 三条仏壇  
 ▲19-3 長岡仏壇

- [2 福島県 4件]**  
 ▲21 会津本郷焼  
 ▲22 会津塗  
 ▲23 大塚相馬焼  
 ▲24 奥会津編み組細工

- [3 山形県 5件]**  
 ▲31 羽越しな布  
 ▲32 山形鋳物  
 ▲33 置賜紬  
 ▲34 山形佛壇  
 ▲35 天童将棋駒

- [4 秋田県 4件]**  
 ▲41 川連漆器  
 ▲42 秋田杉桶樽  
 ▲43 大館曲げわっぱ  
 ▲44 樺細工

- [5 宮城県 3件]**  
 ▲51 雄勝硯  
 ▲52 鳴子漆器  
 ▲53 宮城伝統こけし

- [6 岩手県 4件]**  
 ▲61 南部鉄器  
 ▲62 秀衡塗  
 ▲63 岩屋堂軍笛  
 ▲64 浄法寺塗

- [7 青森県 1件]**  
 ▲71 津軽塗

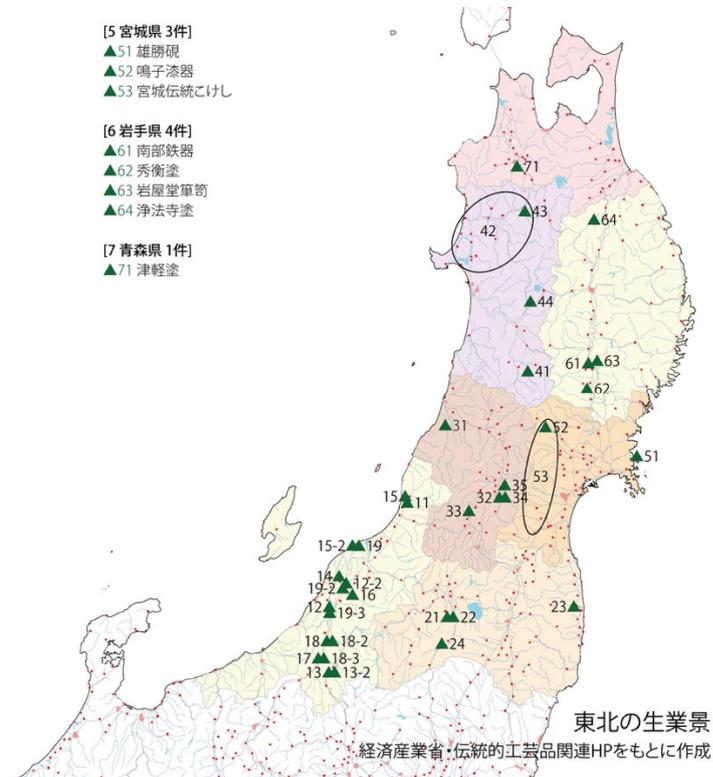


図11 東北7県の主な伝統的工芸品

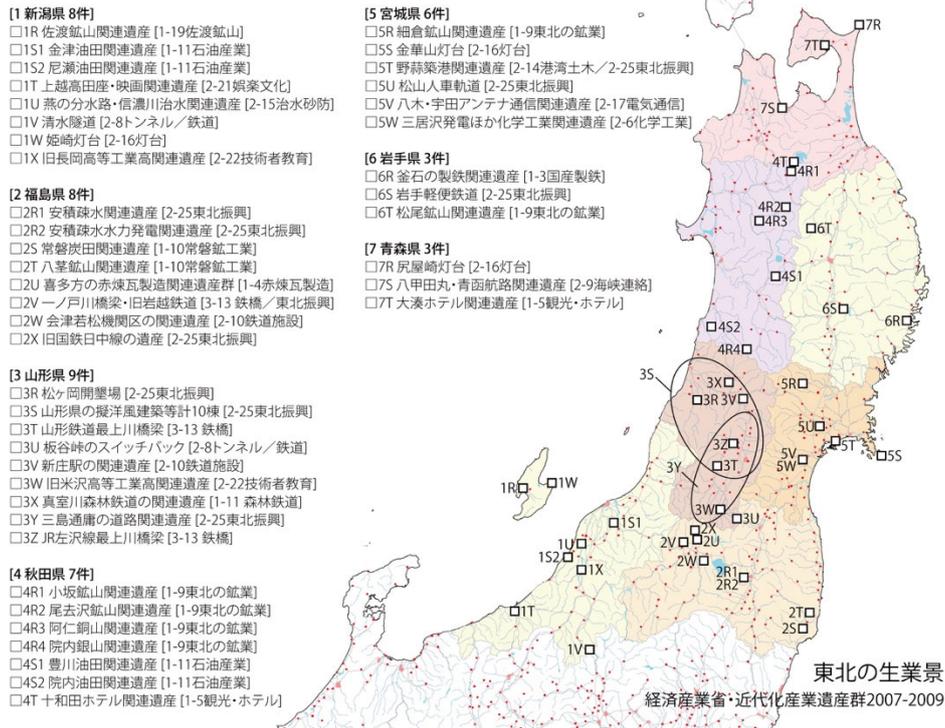


図12 東北7県の主な近代化産業遺産

③ 実施項目C1・C2・C3における平成29年度の成果・知見と課題

d) 丸森シルクコアトリエの創出

疲弊し断片化した地域の小さな生業を共同に至らしめるCAの企画は、丸森では想定以上にフィットすることとなった。キーパーソンの多くは女性陣であり、とりわけ契機を与えて頂いた現教育長S氏、現在の活動の中核を担っているA氏の存在は大きい。こうした研究協力者の方々が中心となり、我々研究実施者が地元での協力者となって、養蚕から織物、和紙まで、関係者の「単アトリエ」を巡り、討議を重ねてきたところ、関係団体の一つが間借りしている町家の一角を「コアトリエ化」したい、との話が浮上し、学生を交えた多世代チームによる「小さなリノベ」が始まった。研究期間内に一つでも着手できればと望んでいた我々の想定を超える反響、成果として、留めておきたい。

e) 大崎の食産業と生活景

大崎市では、10年前にも「鳴子の米プロジェクト」なる先駆的取組があったが、ブルーファームにみられるような近年の取組も特筆される（同社はグッドデザイン賞を受賞）。これに世界農業遺産が加わり、注目を集めている。だが、実際には市域が極めて広く、そうした取組を集積して感じることは難しい。

とはいえ、例えば全国2位を誇る大豆生産と関連食品加工業など、特筆すべきトピックは無数にある。重要なのは「どこにでもある美味しさではなく、文化と物語」と語るのはブルーファームのH代表である。その意味で、当地方において氷点下と摂氏一桁温度を繰り返す冬の気候風土を利用した「凍み豆腐」を乾燥させる生活景には説得力がある。すなわち、無数に成功例がある農・食の分野こそ、生活景の側面を丁寧に分析する意義が認められるかもしれない、といった気づきが、今年度の発見であった。

なお、本PJとしては、衣/住のCA/LS実践に比べて遅れており、今後いっそうの

努力を重ねていく必要があると捉えている。

f) スレート民家の地域性、関連性、国際性

代表者らは、本P Jの着手以前から建築史学としてのスレート民家研究を重ねてきていたが、これを活用保全しようという取組によって、研究面においてもより深く考察を行うに至った。

宮城県から岩手県南に至る広域にわたっており、実はその意匠には地域性、時代性が認められる。広域分布を意図して提唱した「千軒講」は、漠然と各々の多様性を育もうという志向を有していたが、現地を巡るワークショップキャラバンによって細やかな差異を再認識し、地区別、集落別に生活景を読み解く必要性に帰着した。このことは、各集落において主体的なまちづくり的取組が進められ、そのなかにスレートが再 positioning される必要性を示しているといえる。

そのようなローカルな課題がある一方で、丁寧に近代史を読み解くことにより、洋風建築の屋根工事をけん引した雄勝地区、昭和戦後の葺き替えの中核となった登米地区、産地としては広がりを見せなかったが、一定量の地場産材と登米からの波及が認められる入谷地区・高田地区と、地域や集落が差異と関連性を持っていることにも気づかされた。

さらには、台湾南部の調査や英国北ウェールズの調査によって、こうした国内では無名の文化遺産が、世界的な共通性・関係性を持っていることにも改めて気づかされた。ローカルなものほどコンテンツとしての個性があり、グローバルな展開可能性を持っていることは、今後の活用保全の動きにおいても大いに参考になるものといえよう。

g) その他：仙台の動き（LIVE+RALLY PARKほか）

今年度末、仙台の都市景観の中核とされる定禅寺通沿いの公園内に、東北各地の工芸、産品を集めた仮設のカフェ併設店舗がオープンした。マルシェについての近年の兆候は上述の通りであるが（写真27, 図13）、本P Jが題材とする領域が、すでに一般市民の関心事となり始めていることを示すものといえ、年度当初には予想し得なかったものである。次年度は積極的に関係を構築し、目標達成に寄与させていきたい。



写真27 仙台・薬師堂手づくり市の風景

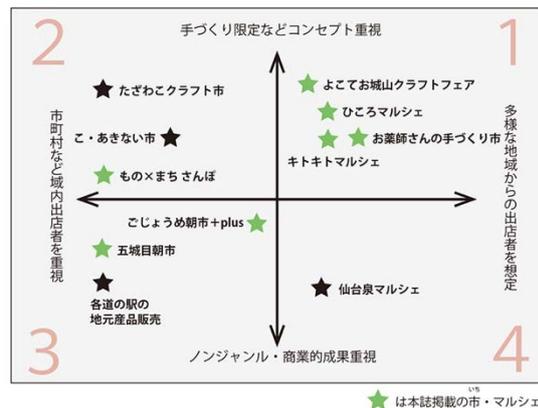


図13 近年の市・マルシェの多様性

(3) 当該年度の成果の総括・次年度に向けた課題

期間の折り返し地点を迎える今年度の研究開発は、暗中模索から始まったとはいえ、多くの協力者を得ることができ、C1・C3の特定プロジェクトが軌道に乗り始めるなど、もっとも手間のかかる案件が一定の進捗に至っている。関係先が多いため情報整理が遅れ

気味であるが、この調子で後半を進めていきたい。

一方で、大崎における農と食のコアトリエは、着手から日が浅く、遅れている。C1やC3と同様に進めることは難しいが、着目すべき事例を取材・支援することはできる。今後の課題としたい。また、北東北におけるCA系の取組は、未だ十分なフィールド調査ができず遅れている。

次年度は、より柔軟に、3チームの体制が協力するよう努力していきたい。

## 2. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況

現時点では、開発成果の活用・展開は、スレート民家の屋根解体情報が度々PJに寄せられる際にDBを確認するなどに留まっている。個人情報でもあり、引き続き慎重に対応していくが、むしろ発信が不足している面も否めない。各特定PJを地域主体で運用する状況をめざしていければと考えている。

## 3. 研究開発実施体制

### (1) MNG：研究開発マネジメント(MN)グループ

①リーダー：大沼正寛（東北工業大学大学院ライフデザイン学研究科、教授）

#### ②実施項目

A1：CA/LSDBの構築

A2：CA/LS比較事例の視察調査と生活景醸成をめざす共同アトリエのモデル提示

A3：仮称・季刊コアトリエ+Blog(WEB)による活動の記録と発信

※なお、実施項目

D：CAネットワーク化と公開サミット

E：課題解決WSとCALSL理論化

についても、平成30年度の本格実施に向けて、当グループで適宜検討を進めていく。

### (2) CAG：農山漁村共同アトリエ(CA)群調査グループ

①佐々木秀之（宮城大学事業構想学群、准教授）

#### ②実施項目

A1：CA/LSDBの構築

B1：市民の地域資源への気づきのための支援ツールの開発（宮城大）

B2：生業・産業の景観とその連携性に関する研究（秋田公美大）

C1：柔和材CA/LSの多世代共創実践

C2：保存食品CA/LSの多世代共創実践

### (3) LSG：生活景醸成(LS)と環境デザイン調査グループ

①竹内泰（東北工業大学大学院工学研究科、准教授）

#### ②実施項目

A1：CA/LSDBの構築

B3：文化遺産保全と生活景醸成に関する事例調査

C3：スレートCA/LSの多世代共創実践

#### 4. 研究開発実施者

##### MNG：研究開発マネジメント（MN）グループ

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
○大沼 正寛	オオヌマ マサヒロ	東北工業大学	大学院ライフデザ イン学研究科	教授
宮本 愛	ミヤモト アイ	東北工業大学		研究支援コーデ イナーター
渡邊 博一	ワタナベ ヒロカズ	東北工業大学		研究支援コーデ イナーター

##### CAG：農山漁村共同アトリエ（CA）群調査グループ

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
○佐々木 秀之	ササキ ヒデユキ	宮城大学	事業構想学群	准教授
菅原 香織	スガワラ カオリ	秋田公立美術 大学	美術学部	准教授
大沼 正寛	オオヌマ マサヒロ	東北工業大学	大学院ライフデザ イン学研究科	教授
宮本 愛	ミヤモト アイ	東北工業大学		研究支援コーデ イナーター
渡邊 博一	ワタナベ ヒロカズ	東北工業大学		研究支援コーデ イナーター

##### LSG：生活景醸成（LS）と環境デザイン調査グループ

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
○竹内 泰	タケウチ ヤスシ	東北工業大学	大学院工学研究科	准教授
阿部 正	アベ タダシ	東北工業大学		研究支援コーデ イナーター
大沼 正寛	オオヌマ マサヒロ	東北工業大学	大学院ライフデザ イン学研究科	教授

## 5. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など

### 5-1. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など

#### (1) 情報発信・アウトリーチを目的として主催したイベント

年月日	名称	場所	概要・反響など	参加人数
H29/7/6 ～7/8	スレート千軒講ワークショップ@雄勝	雄勝町大須地区	河北新報紹介、石巻市外からも参集	約 20 名
H29/8/19 ～8/20	スレート千軒講ワークショップ@入谷	南三陸町入谷地区	域内の別業種（ワイナリー等）の方も参加	約 15 名
H29/9/29 ～10/1	スレート千軒講ワークショップ@登米	登米市登米地区	宮城県内外から参集	約 50 名
H29/11/24 ～11/26	スレート千軒講ワークショップ@矢作	陸前高田市矢作地区	岩手県内外から参集	約 30 名
H29/12/19	丸森シルクコアトリエオープンイベント	丸森町陽だまり工房	宮城県内外からも参集	約 15 名
H30/3/17	丸森シルクコアトリエ「春の装い」	丸森町陽だまり工房	宮城県内から参集	約 20 名

#### (2) 研究開発の一環として実施したイベント

年月日	名称	場所	概要・反響など	参加人数
H29/5/26	丸森第1回コアトリエ会議	丸森町S邸	その後のコアトリエ活動のきっかけとなった	約 15 名
H29/7/11	丸森第2回コアトリエ会議	丸森町養蚕農家M邸・S邸	養蚕農家の実情と今後の協力可能性を学んだ	約 15 名
H29/8/28	スレート民家調査@石巻河北	北境地区・飯野川地区ほか	4大産地以外の景観卓越地区の内情を視察	約 10 名
H29/9/16	丸森第3回コアトリエ会議	丸森町F邸	シルク和紙の工程を学んだ	約 15 名
H29/10/6 ～10/7	燕三条K O U B Aの祭典視察ツアー	燕・三条両市内各地	コアトリエと公開方法の参考とした	8 名
H29/10/14	丸森第4回コアトリエ会議・シルクフェスタ協力	丸森町陽だまり工房	丸森コアトリエを実際に創出する気運が高まり、計画と施工に着手	約 15 名
H29/12/8 ～12/8	大崎農と食のコアトリエ研究相談	宮城県振興局大崎合同庁舎	大崎の世界農業遺産と関連の動きを知り、今後の動きを検討	約 10 名
H29/12/19	丸森第5回コアトリエ会議	丸森町陽だまり工房	自分たちで改修したコアトリエで展示販売	約 15 名
H30/2/9	丸森第6回コアトリエ会議	丸森町陽だまり工房	次年度計画を討議	約 10 名
H30/3/17	丸森第7回コアトリエ会議	丸森町陽だまり工房	紹介パンフレットなどについて討議	約 15 名

(3) 書籍、フリーペーパー、DVD

- ・季刊コアトリエ 2号、大沼PJ、東北工業大学、2017年6月、関係者へ配付・郵送
- ・季刊コアトリエ 3号、大沼PJ、東北工業大学、2017年10月、関係者へ配付・郵送
- ・季刊コアトリエ 4号、大沼PJ、東北工業大学、2018年1月、関係者へ配付・郵送
- ・季刊コアトリエ 5号、大沼PJ、東北工業大学、2018年3月、関係者へ配付・郵送

(4) ウェブメディアの開設・運営、

- ・コアトリエ-この地に技ありプロジェクト、<http://co-atelier.jp>、2018年3月

(5) 学会 (5-3. 参照) 以外のシンポジウム等への招待講演実施等

- ・矢作まちづくり報告会、天然スレートのある景観とまちづくり、2018年2月4日、矢作コミセン、30名ほどの住民が参加、その後は幾つかの民家を巡回視察、後日修復物件が増えた)

## 5-2. 論文発表

(1) 査読付き ( 0 件)

●国内誌 ( 0 件)

●国際誌 ( 0 件)

(2) 査読なし ( 3 件)

- ・佐藤豪・伊藤諒佑・大沼正寛・阿部正・竹内泰、登米市登米町日根牛北沢におけるスレート開発略史と残材利用のための山林の概況把握、日本建築学会東北支部 計画系研究報告集 第80号、2017年6月
- ・大沼正寛・竹内泰・阿部正・菅原香織・佐々木秀之、東北地方の文化的景観・伝統工芸・産業遺産等からみた陸前スレート民家・集落の位置づけ-有形無形地域遺産と生業景の継承をめざした複眼的考察-、日本建築学会大会学術講演梗概集 (中国)、6077、pp153-154、2017年9月
- ・阿部正・竹内泰・大沼正寛、南三陸町山内家主屋の建設・屋根替えプロセスと葺き工法の概要、日本建築学会大会学術講演梗概集 (中国)、6078、pp155-156、2017年9月

## 5-3. 口頭発表 (国際学会発表及び主要な国内学会発表)

(1) 招待講演 (国内会議 0 件、国際会議 0 件)

(2) 口頭発表 (国内会議 0 件、国際会議 0 件)

(3) ポスター発表 (国内会議 0 件、国際会議 0 件)

## 5-4. 新聞報道・投稿、受賞等

(1) 新聞報道・投稿 ( 8 件)

- ・河北新報 2017年5月11日 特集・探る「生業とくらし-保全を」大沼正寛教授
- ・河北新報 2017年6月30日一面・河北春秋
- ・日本屋根経済新聞 9月18日「民家2千棟、維持へ」
- ・河北新報 2017年10月16日朝刊「天然のスレート価値見直す『スレートアカデミー』」
- ・東京新聞 2018年1月23日朝刊「東北復興日記」第239回「コアトリエと生活景」大沼正寛教授
- ・東京新聞 2018年2月6日朝刊「東北復興日記」第240回「土着の風景を問う」阿部正氏
- ・東京新聞 2018年2月13日朝刊「東北復興日記」第241回「シルクの魅力を発信」阿部倫子氏
- ・東京新聞 2018年2月20日朝刊「東北復興日記」第242回「毎月8日楽しむ定期市」西大立目祥子氏

(2) 受賞 ( 0 件)

(3) その他 ( 0 件)

#### 5-5. 知財出願

(1) 国内出願 ( 0 件)

#### 補注

(1) 河北新報 2017年10月16日朝刊「天然のスレート価値見直す『スレートアカデミー』」

#### 参考文献

- 1) 日本建築学会編・後藤春彦ほか著「生活景—身近な景観価値の発見とまちづくり」学芸出版社, 2009
- 2) 例えば、伊藤正昭「新地域産業論 産業の地域化を求めて」学文社, 2011
- 3) 例えば、内山節「半市場経済 成長だけでない『共創社会』の時代」角川新書, 2015
- 4) 例えば、文化庁文化財部記念物課編「日本の文化的景観」同成社, 2005